

『極小規模校での思い出』

私が新米教頭として赴任した学校は、海沿いの小さな地域にある全校児童10名の複式の小学校だった。学級編成は、1・2年複式学級、3・4年複式学級、そして、5年単式学級、この3学級編成の小学校であった。6年児童はいなくて、5年学級は1名のみであった。職員数は、校長、教頭、一般の先生2名の4名と臨時公務補さん1名、つまり5名の職員構成であった。教頭も学級担任とならざるを得なく、私は5年生の担任でもあった。学校規模が小さいので事務職員の配置がなく、教頭は学校事務の仕事も担当する。また、教頭職というのは学校内の業務にとどまらず、地区生涯学習推進会議事務局、複式教育関係団体の役職、町内教育研究会事務局関係の業務など、その仕事は多岐にわたる。

教頭になる前まで1,000人規模の小学校で10年以上勤務していた私は、「10人規模の学校に勤めるということは、どれほど時間にゆとりがあるのだろう」などと思っていたが、とんでもない思い違いだった。この多岐にわたる業務をこなすのは、新米教頭にとっては至難の業だった。学級担任としてほぼ午前中は教室で授業を行わねばならない。体育、家庭科、音楽、図工は他の学年と合同で授業を行うため、授業をしなくてよいその時間が業務遂行のための大切な時間となる。学級の児童が1名とはいえ、授業の教材研究をしなければならないし、学校事務については、経理にかかわる7枚つづりの伝票の作成や給食関係の業務など、教育委員会に提出する各種調査、報告書、また事務局を受け持つとそれに付随する書類の整備、案内、依頼文書の提出など時期を逸してはならない仕事が次から次へと。教育委員会に出向いたりしなければならぬとなると、片道25キロメートル以上の道のりを移動しなければならないため、往復にかかる時間もけっこうなものだ。さらには僻地3級の地に単身赴任したものだから、家事もしなくてはならない。近くにコンビニや商店などはない。移動訪問食品販売車には随分と助けられた。

と、ここまでではつらかったこと、苦しかった思い出ばかりを述べているが、けっしてその当時のことがいやだったわけではない。

振り返ってみると、その頃の宝物のような時間に戻ることはけっしてできないが、実に思いで深く充実した日々を過ごしていたことが今でも鮮明に蘇る。

何がよかったのかというと、世帯数がおよそ70戸ほどのその小さな地域の全ての人々が、子どもは地域の宝として心の底から大切に思っていると感じられたからだ。

力足らずの私が何とか教頭職を務められたのも、保護者をはじめ地域の人々の多大なる学校への支援があったからと思う。その前まで勤務していた大規模校では、無理難題の要求を突きつけてくる保護者が年々増え、学校と保護者との関係がぎくしゃくしていたこともあり、その小さな学校とは天と地の差であった。同じ時代にそれぞれの学校が存在する

とはとても思えないような、まるでタイムマシンに乗って異次元の世界に来てしまったような感覚さえ覚えた。

子どもたちはというと、何の毒気にもさらされていないというか、人を疑ったりしたことなどないというか、実に素朴で屈託ない。また、小さな地域の中で、どの住民とも知り合っているため、大人と挨拶を交わしたり、気軽に話したりすることに何の抵抗もない様子であった。また、地域の大人は、非常に数少ない子どもたちを自分の子どもか孫かのように分け隔てなく扱い、時に子どもが危ない遊びなどしていると遠慮なく叱りつけたりしていた。叱られた子どもは、日頃から可愛がってもらっているので、口ごたえするわけでもなく、極めて素直に言うことをきく。このような雰囲気はずっと昔から変わらずにその地域ではごく当たり前のこととして受け継がれてきたのである。

さて、そのような子どもたちを預かる学校としては何が課題となるか。それは、少人数であるということが悩みの種となる。学級に1名ないし3名程度で生活するのを当たり前とする子どもたちが、将来大きな集団の中にもものおしせずに入っていけるだろうかということである。

年間数回は、他校の子どもと合同で学習したりする機会を持っていたが、毎日とはいかない。子どもたちが大きな集団の中でおじけたり萎縮したりすることがないようにするには、自信を持たせなければならない。

そこで、2時間目と3時間目の間の中休みに入る前に「くり返しタイム」という時間を毎日設定し、全校の子どもが一堂に会し、計算、漢字、文章作り、発表などの練習を行うことに力を入れた。短時間ではあったが、子どもたちは集中力を発揮して、計算や漢字書き取り、文章作りをこなす。

校長はじめ、全職員がその場でまるつけをくり返す。文章作りは、与えられたテーマにそって、短時間で自らの思いや考えを書かせる。低学年のうちは、なかなか書くことができない。多少下手な文章でも短くてもよしとする。ところが、そのくり返しと継続により、半年、1年と経つうちに、書けるようになる。発表練習については、原稿なしに、身近で起きたことや世間で起こったことについて思ったこと、感じたことを発表する。これも低学年のうちは、ワンパターンで単調な発表でもよしとするが、学年が進むにつれ上手な発表ができるようになる。上の学年が上手になると下の学年もそれを手本とするようになる。

「くり返しタイム」の取組によって、考えに考え、しまいにはできませんという子どもがいなくなった。とにかくその時間でやり遂げるという習慣と集中力が身についた。単なる訓練といえばそれまでだが、できるようになり、誉められることによって、子どもはぐんぐんと自信をつけていく。

私とその学校を離れた後、俳優の地井武男がその地域を訪問したテレビ番組が放映されたことがあった。子どもたちが地井さんとけっこう上手に会話している場面を見てうれしさを覚えた。

少ない人数だったから子どもたちの力を引き出すことができたのかもしれないが、子どもは地域の宝とする人々が学校への支援を惜しまず応援団となってくれたその力は極めて大きい。